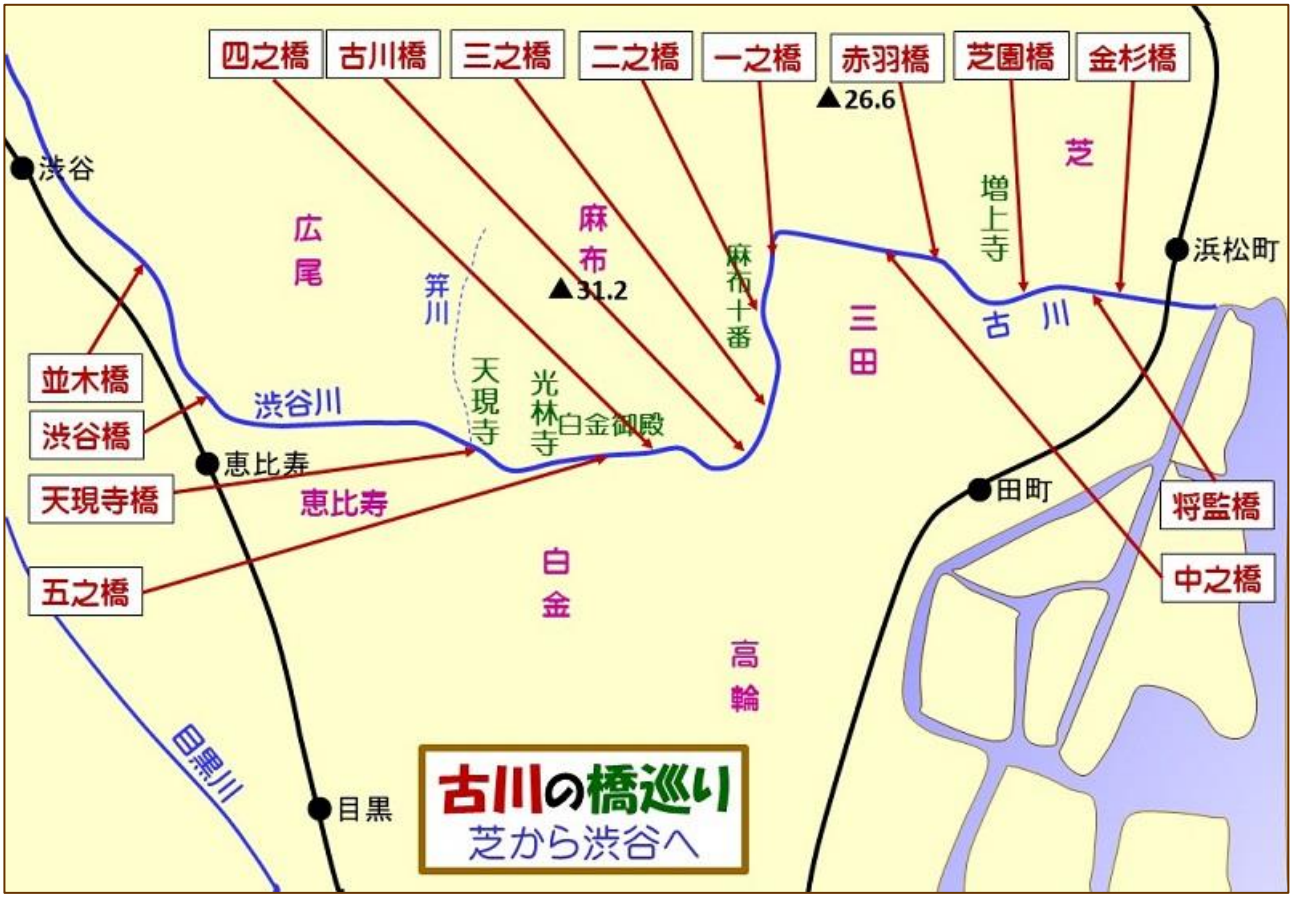
2022.4.19.
T.Kobayashi

番号順に付けられた橋の名
芝から渋谷へ古川を遡る

東京に路面電車（都電）が走っている頃、①番の電車は上野駅前から品川駅前までを走っていた。
金杉橋と三田の間に「東京港口」という停留所があった。現在の芝四丁目交差点あたりだったと思うが、国鉄のガードを潜ると東京湾の日の出桟橋につながる道が走っていた。船着場は異国への出入口のような気がする時代だったので、気になる停留所だった。
金杉橋の交差点は、渋谷駅前行の㉞番の始発の停留所だった。この路線は、芝や三田から渋谷駅へ行くのに大変便利だったが、それよりも「橋巡り」が楽しい路線でもあった。始発から終点までの 16 停留所の内 12 停留所は橋の名前になっていた。しかも一ノ橋から四ノ橋まで数字通りに並んでいるので、これは何かあるなと好奇心をかき立てられた。
古川を遡って渋谷という谷間の街へと向かう。高台と谷間、そこにある水の流れなどなどを感じながら車窓の景色を楽しめる路線だった。当時の停留所の名前を辿りながら、歴史を感じて見ることにした。
（以下の文中の赤字は、都電㉞番の停留所を示す）



金杉橋（かなすぎばし）、下を流れる川は古川。都心の河川や水路は首都高速道路に占領されてしまい、水辺を感じるのは難しい状態になってしまったが、古川についてもまったく同じ状況である。海抜４m、江戸時代の海岸線は今の山手線の線路の辺りなので、嵐には弱い場所だったらしい。
川の北側は「芝」と呼ばれ、岸辺まで増上寺の門前町が連なり、一種独特な雰囲気を持つ街だった。
金杉橋とわずかな距離で並ぶ橋が将監橋で、門前町の西側の通りにつながっていた。
古川河口の一帯を金洲崎（かなすざき）と言ったことから、これが転じて金杉橋となったと言う説があるが、杉に似た栴檀の木があって暗夜に金色の光を放ち沖合から目印になったという説もあるらしい。
古川の南側は「三田」と呼んだ。「三田」は、朝廷に献上する米を作っていた屯田（みた）があったと言

う説、伊勢神宮などの御田があったと言う説があり、吾妻鏡にも記載がある古い地名。江戸時代には、大名屋敷や御家人の屋敷が並んでいた。偶然見つけた古地図を覗いて見たが大名屋敷ばかりで、田畑は見あたらなかった。現代の地図で見たり、自分で歩いて見たりもしたが、慶應義塾・三井倶楽部・いくつかの国の大使館などが大きな区画を占めているほかは、大きさも形も比較的ランダムな区画が多く、大名屋敷があったと思えるような重厚さよりも町屋の親しみの方が色濃い感じがした。
芝園橋は、大正 15 年に架けられた橋で、橋の名前がどことなく近代的。江戸時代の地図では古川の北岸まで増上寺の別院や学寮が並んでいる。現在の御成門につながる道はこの橋と同時に出来たのだろう。交差点を横切るのは、三田から駒込方面へ行く②番と㊲番。
赤羽橋と隣の中ノ橋の間に赤羽河岸と名付く水運の拠点があったことからこの部分を赤羽川とも言ったらしいが、これが後に赤羽という地名になった。このあたりに土器職人が多く暮らしており、赤い素焼きの土器が産み出されていたので、赤埴（あかはに）という地名につながったと言う説が有力とか。河岸の南側には久留米藩有馬家の屋敷があり、屋敷内に久留米の水天宮を勧請した水天宮が配されていた。明治 5 年に日本橋蛎殻町に移されて今の水天宮につながったとのこと。品川駅前から北に向かういくつかの路線が交差する赤羽橋は都電交通網の要衝になっていた。
麻布中ノ橋は、赤羽橋と一ノ橋の間に後からできた橋なので「中ノ橋」と名が付いた。現在の橋は欄干が火の見櫓をデザインしたものになっている。広重の「増上寺側から見た古川の風景」に火の見櫓が描かれているので、昔はここに建っていたのかもしれない。
一ノ橋は、元禄 12 年（1699 年）に徳川綱吉の別邸「白金御殿」造営にあたり資材運搬のために古川を浚渫整備した時に架けられた橋で、番号順に橋の名前が付けられた。御殿は四ノ橋の北側（左岸）に造られた。
河口から西に向かって遡ってきたが、ここで川は直角に曲り、遡るコースも南に向かうようになる。
二ノ橋は、徳山藩の毛利日向守屋敷があったことから、「日向橋（ひゅうがばし）」とも言われていた。一ノ橋と二ノ橋の間の左岸（西側）一帯を麻布十番と呼んでいた。古川改修事業を進める中で、十番目の組を担当する者が住んでいたことから「十番組屋敷」と言われていたことが由来らしい。低地で湿地なので、住環境としては良いとは言えない所だったようだ。
三ノ橋は、当初は右岸（三田側）の松平肥後守の屋敷脇にあり、「肥後殿橋」「肥後橋」と言われていた。いずれの橋も、そこに住んでいた殿様の名などが冠されて、時代によって通称が変化していた橋もあったらしい。綱吉の代で一ノ橋から四ノ橋まで通し番号が振られたが、いつまでも使われていた名かどうかは分らない。
三ノ橋と次の古川橋の間で川はまた直角に曲り、遡る旅は西向きに変る。
古川橋は、橋が架けられたのは昭和初期なので、歴史を物語る話題は少ないが、「古川に架かる古川橋」なので無視出来ない。魚藍坂（ぎょらんざか）を通って目黒・五反田・品川方面への路線を左に分ける。
四ノ橋は、高輪と麻布本村を結ぶ道筋にあり、昔からあった橋だと思われる。寛永 7 年（1630 年）に幕府の薬草栽培所ができ、その脇の坂道には薬園坂と名が付き、橋の名は薬園橋と言われた。
五代将軍綱吉の時代に、この場所に白金御殿を建てて、薬園は小石川御殿へ移された。
四ノ橋の上に五ノ橋があったが、間隔が狭いせいか都電の停留所にはならなかった。
光林寺前は、臨済宗妙心寺派の慈眼山光林寺の門前にある停留所。延宝 6 年（1678 年）に盤珪永琢によって、麻布市兵衛町に創建されたが、元禄 7 年（1694 年）にこの地に移された。入口は古川を目の前にした低地だが、奥の墓地は丘の上になっており、この丘をさらに上り有栖川宮記念公園まで行くと海抜 30m を越す。麻布の地形がよくわかる。
天現寺橋付近で渋谷川に北から流れてくる笄川（こうがいがわ）が合して古川と名を変える。笄川も、麻布笄町という美しい町の名も消えてしまった。有栖川宮記念公園と聖心女子大の間の外苑西通りが昔は笄川の谷だったと思われる。これまでは港区だったが、ここからは渋谷区になる。古川橋で合流した品川駅前と四谷三丁目を結ぶ⑦番が、右へ別れて広尾の方へ走って行く。
橋のたもとの川の北岸にある多聞山天現寺が由来。小日向御箪笥町にあった臨済宗大徳寺派の末寺であ

る普明寺を享保４年（1719 年）にこの地に移して天現寺とした。つまり天現寺橋という橋の名は、白金御殿造営により整備された橋よりも 20 年ほど後に誕生したことになる。
下通り二丁目の停留所があったのは、新旧の地図を並べてみると現在の広尾１丁目交差点あたりだろうか。渋谷区の町名は大きく変ってしまい、昔の地名を今の地図から見つけることは難しくなった。
その昔は村や大字・小字が細かく存在したのだが、昭和７年に現在の渋谷区が成立した時に主要な道に沿って「XX 通り X 丁目」という町名表示にした所が多い。さらにその後の改正では「広尾」「恵比寿」などの大区分を元にしてその中を丁目に分割した。町名改称の度に異なる分類方法で区画するために、新旧の地名の連関を遡って確認するのが難しくなってしまった。
渋谷橋は、恵比寿・中目黒方面へ抜ける駒澤通りへの分岐になるが、この道にも築地から来る⑧番の都電が中目黒まで走っていた。橋の近くには安土桃山時代に開山した曹洞宗の福昌寺や、臨済宗大徳寺派の尼寺である天桂禅庵などがある。
中通り二丁目は、現在の東三丁目交差点あたりだったと思われる。交差点を広尾高校の方へ少し入ると伊藤稲荷神社という変った名前の神社がある。歴史を大きく遡ると、この地に伊藤何某という豪族の屋敷があり、敷地の中に稲荷神社があったことから神社に名が付いた。また、これが由来となってこの地は「伊藤前」という地名だったが、昭和７年の地名整備で消滅して、他の町もあわせて中通り二丁目となったらしい。
並木橋は、江戸時代には幕府の御入用橋で金王（こんのう）下橋と言われていた。明治時代に掛け替えられた時に並木橋となった。青山方面へ坂道を上っていくと左手に金王八幡神社があり、神社への並木道が橋の名前になった。
渋谷駅前はその名のとおり、道玄坂・宮益坂などに挟まれた谷になっている。「渋谷」という地名の由来は諸説あるらしいが、どれが有力なものかはわからない。はっきり言えることは「谷」という地形に由来していることだろう。また、周辺の地名を挙げてみると、青山・代官山・初台などの「高地を意味する地名」と富ヶ谷・幡ヶ谷・千駄ヶ谷・神泉など「低地を意味する地名」といくつもある坂道を考え合わせると、近代化しすぎて歴史が分らなくなってはいるが、元の地形を想像することができる。

古川を江戸時代の河口である金杉橋から遡って渋谷まで来たら、なにやら耳の奥から「ゴトンゴトン」「チンチン、ゴ～ン」と都電の響きが湧き出るように蘇ってきた感じがする。
都電がなくなってからは、新橋駅や田町駅から渋谷駅へ行くバスが走っていたが、やはり路面の響きがないと風景の味わいもひと味落ちるような気がした。
古川すなわち渋谷川は、さらに遡っていくと新宿御苑の池に辿り着く。この池の水は、さらにいくつもの小さな川の流れを集めており、玉川上水ともつながっている。江戸時代の地形や民の営みをも感じる事が出来る「生きた水の流れ」を味わうことができたのは喜ばしいことではあるが、高速道路の下に隠れてしまった河川や地名改称が重なって元の地名やその意味が消えてしまっていることなど、歴史年表の中に埋没しかかっているものが多々あるのは少々残念な気もする。

以上